別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：　木村　政樹

論文題目

戦前・戦後日本における知識人論と文学史についての研究

――社会運動と文学運動との関連を中心に――

木村政樹氏の学位請求論文『戦前・戦後日本における知識人論と文学史についての研究――社会運動と文学運動との関連を中心に――』は、日本の二十世紀における革命を意識した政治運動や労働運動の担い手とその思想表現を、同時代の文学者のそれとの相互関係の中でとらえようとした研究である。

序章では、丸山真男の『現代政治の思想と行動』（一九五六～五七）を中心とした知識人論を批判的に検討し、知識人を論ずる際に使用される中心的概念の理論的位置づけがなされ、論文全体の見取り図が提出されている。

第一部では十九世紀末から二十世紀初頭の月刊雑誌を中心にしながら、知識人の表象の特徴を分析している。

まず第一章においては、雑誌「近代思想」を中心にしながら、日本におけるロシア文学の受容と大逆事件にかかわった知識人の思想形成のかかわりを論じている。とりわけ大逆事件の弁護人をつとめた平出修が論じた記事における知識人に関わる語群の分析を通じて雑誌「太陽」の読者層が、同時代的に「知識階級」とみなされていたことを明らかにした。

第二章では雑誌「月刊新社会」において、「知識階級」と「文学」がどのように結びつけられていたかが論じられている。この雑誌で中心的な役割を担った堺利彦の言説における「中間」的な階級に対する論点を整理し、社会主義者が、どのように「文学」の可能性について考えていたかが明らかにされていく。

第二部では、知識人と革命運動の主体をめぐる大きな論争の発端となった有島武郎の「宣言一つ」と、それをめぐる論争過程が論じられていく。

第三章では、「宣言一つ」をめぐる論争が「知識階級」という語の定義をめぐるものであったことが明らかにされている。これまで不毛とされてきた「宣言一つ」論争について、筆者は「知識階級」概念を理論的に整理した過程として評価している。

第四章では、アナーキストとボリシュヴィキを結びつける契機として「宣言一つ」論争をとらえ直し、「労働社」の構成員の一人であった吉田一の思想と運動のかかわりについて分析している。

第五章では、「宣言一つ」の著者有島武郎とその周辺に位置していた人々のマルクス主義の理論的傾向とのかかわりをとらえようとしている。この時期話題になった山川均の「方向

転換論」における「無産階級」を実体化しようとする志向性に注目し、有島の使用した「第四階級」との理論的な重なりと違いを分析している。また福本和夫の「無産階級」論との重なりと違いを詳述することで、この時期の知識人の側の、革命の主体についての認識を解明している。

第三部ではプロレタリア文学運動と近代日本文学史の書かれ方の相関関係が論じられている。

第六章では、宮本顕治の芥川龍之介論「敗北の文学」が論じられ、文壇における芥川論と同じ時期の「円本ブーム」が重なり、近代文学史論の様相をおびた中で、宮本がその現象をロシア文学を媒介としながら左派陣営の側に芥川を位置づけたことも明らかにした。

第七章は平野謙の「プティ・ブルジョア・インラリゲンツィアの道」を分析し、芥川龍之介を批判的に乗りこえる、プロレタリア文学の批判的継承が論じられている。

第八章では中村光夫の批判の在り方が、同時代のプロレタリア文学の作家や講座派マルクシズムとの関係で論じられている。

第四部は『近代文学』同人の主張が、戦時下の知的背景と共に論じられている。

第九章では、荒正人のロシア文学についての認識について論じながら、そこにジョルジ・ルカーナの思想の影響を見出している。

第十章では平野謙の「昭和文学のふたつの論争」をとりあげ、「政治と文学」をめぐる中野重治との論争の文脈の中で、文学史認識の在り方をとらえ直している。

第十一章では、プロレタリア文学の再検討としての本多秋五の戦後批評を位置づけていく読み直しを試みている。

終章では、「知識人論」としての文学史のとらえ直しの重要性を主張し全体をまとめた。

審査の中においては、論述の過程が難解で主張したいことが十分に伝わってこない、これまでのプロレタリア文学史、あるいは民主主義文学運動史との違いをより明確にすべきだ、戦中の「知識人」が不十分ではないかといった批判が出された。しかし、これまで「政治と文学」という二項対立的枠組でのみ語られてきた歴史過程に、「知識人論」を位置づけたことによって、文学史をとらえ直す契機を見出したことは高く評価された。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するものにふさわしいものと認定する。